

# ラグビーワールドカップ 2019 における日本代表のベスト 8 進出のための方策

## The Strategy for the Representative from Japan to Advance to The Best 8 in The Rugby World Cup 2019

1K10C106-7 小川 利貴

主査 吉永 武史 先生

副査 倉石 平 先生

### 【序章】

2019(平成 31)年にラグビーのワールドカップが日本で開催されることが決定した。日本代表は、同大会でベスト 8 に進出することを目標に設定したが、過去のワールドカップでは 1 勝しかあげたことがなく、世界のラグビー強豪国との差は非常に大きいのが現状である。日本人のラグビーに対する関心も非常に低く、高校生に対する調査でラグビーの試合を観戦してみたいと回答した人の割合は 28%と低いものだった。

そこで本研究では、ラグビーの強豪国であるニュージーランド、ウェールズ、アルゼンチンの若手選手を育成するための取り組みに着目し、加えて国際レベルに向けた強化という視点から、日本人サッカー選手の海外移籍を比較しながら、ワールドカップ日本大会において日本代表がベスト 8 に進出するための方策についての検討を試みた。研究の方法については、ラグビーの強化策やサッカーの育成システムに関連する文献資料やインターネット情報をもとに理論研究を進めていく。

### 【第 1 章】

第 1 章では、ラグビーワールドカップ日本大会で中核となる世代の強化を目的として組閣された「ジュニア・ジャパン」について取り上げ、現段階でどのような強化策がとられているのかについて検討した。その結果、以前より若い世代が海外の選手と試合経験を積む機会が増えつつあることが明らかとなった。また、日本の若い世代の選手がラグビーを行う上での環境を海外の同年代のラグビー選手の環境と比較した結果、日本の若い世代は海外の強豪国の同世代と比べて、ラグビーを行う環境が整備されていないことが明らかとなった。

### 【第 2 章】

第 2 章では、海外ラグビー強豪国の取り組みについて検討した。ニュージーランドでは、選手の情報を共有化し、型にはまらないラグビーに取り組んでいた。また、ウェールズでは、国内の若手の強化を積極的に推進し、国際舞台での成果をあげていた。さらに、アルゼンチンは、独自のラグビーを確立し、急速に力をつけて強豪国の仲間入りを果たした。これらの中でも、ラグビーが文

化として根付いていなかったウェールズの取り組みには、日本にも共通する部分がみられた。競技人口を増やし、ラグビーに親しめる環境を構築したウェールズの取り組みは、日本が直面している課題の解決に向けての示唆を与えるものであった。

### 【第 3 章】

第 3 章では、日本人サッカー選手の海外移籍の現状と日本人ラグビー選手の海外移籍とを比較し、今後のラグビー日本代表の育成がどうあるべきかについて検討した。日本人サッカー選手は、高卒あるいはさらに若い段階から海外のクラブやそのアカデミーに所属し、世界レベルのサッカーを経験していた。一方、日本人ラグビー選手は、サッカー選手に比べて海外に挑戦する年齢が遅く、人数も少ないという現状が確認された。

これらの事実から、ラグビー日本代表の強化に求められることは、まずは競技人口を増やし、早い段階から世界と対等に戦うための基準を知ることが重要といえる。また、日本代表としての戦い方をしっかりと確立し、日本でラグビーをプレーする選手全員が同じ方向へ意識を向けることも日本ラグビー界には必要であろう。

### 【結章】

現在のラグビー日本代表は、世界と対等に勝負できる段階には至っていない。それは選手たちが所属する国内の各チームが、チームとしての勝利にしか意識が向いていないからである。ワールドカップの日本大会でのベスト 8 を目指すのであれば、日本のプロを含めた社会人、大学生、高校生が長期的視点で同じ方向に向かって強化を図っていかなければならない。

しかし、本研究で取り上げた強化策は 3 カ国のみであった。より実現性の高い方策を見出していくためには、それ以外の国々の取り組みを研究する必要があるだろう。また、日本代表がベスト 8 に進出するための方策について、ラグビー指導者や選手にもアンケートを実施し、強化策を検討していくことが今後の課題である。